Room of Luxury Beauty
贅沢美塾

齋藤 薫の 美脳分析 キレイの罠

Photo : HIROSHI TAKASE　Text : KAORU SAITO

さいとう・かおる●女性誌において、多数の連載エッセイを持つほか、美容記事の企画、化粧品の開発・アドバイザーなど幅広く活躍。5月号では待望の別冊付録『美容の正体』第二弾をまとめる。近著には『されど"服"で人生は変わる』(講談社)ほか、『あなたには"顔"があるか?』(講談社)『こころを凛とする196の言葉』(ソニー マガジンズ)など多数

vol.7

性ホルモンの怪

女性ホルモンに有効といわれているローズ。この花びら抽出物が配合されている"飲む美容液"がこちら。美肌に欠かせない天然凝縮の"生コラーゲン"や抗酸化作用のある"ローズヒップ"なども贅沢に配合。口当たりさっぱりの"りんご酢"味。シャンパンに加えてオリジナルカクテルにしたり、ヨーグルトに添えてアクセントに…と、幅広く楽しみながら美しさにも磨きがかかります。●コレコ/ラ ローズ コラーゲン ヌーボー200㎖¥6,300

肌つるつるで体毛のない草食系男子の増加との関係

「私、最近またヒゲ濃くなっちゃって」

「私も! 今月忙しかったからね」

そんな女同士の会話を聞いたことがある。男並みに働く女たちにとって、それが日常会話になるほど、エネルギッシュな女の体の中では、男性ホルモンの分泌が増えている。声が太くなるのも肌が皮脂に傾くのも、眉尻が生えなくなるのも、男性ホルモンの影響って、みんなふつうに知っている。

肌つるつるで体毛のない草食系男子が増えているのとそれは無関係じゃないはずで、どちらが先かわからないが、男と女はやっぱりシーソーのような関係にあるのだろう。けれど、世の中よく見まわしてみると、ヒゲが生えるぐらい頑張っている女に限って、"ゴージャスセクシー"だったり、"男まさり"な一面をのぞかせる女のほうが、一方でより濃厚な"女"を感じさせたりする。それは一体、どういうことなのだろう。

例えば、真矢みきや米倉涼子タイプの女優は、女刑事や実業家、何らかの組織のリーダー的な役回りが多く、明らかにどこか一部に"男性"性を含んでいる。言ってみれば"男性ホルモン"の気配を感じる。でも同時にとりわけセクシー。日本人離れしたラグジュアリーな"女っぽさ"をも感じる。若手でも、真木よう子や香椎由宇といった美形にしてフェロモンがにおい立つ女優たちは、ちゃんと"男性"性を隠し持っている。

そう、女は"男性ホルモン"の分泌量が多いほど、実は女としてのフェロモンを濃厚に放っていると考えていいのだ。そこに"堂々の化学的根拠"を掲げる人もいる。つまり、女性が放っているフェロモンは、わずかな量分泌している"男性ホルモン"から発生しているものと主張する学説があるのだ。確かに、クレオパトラや楊貴妃は、濃厚なフェロモンで男を動かし、"傾国の美女"といわれたが、同時に体の中に"男"がいるタイプ。アンジェリーナ・ジョリーだって、モニカ・ベルッチだって、スカーレット・ヨハンソンだって、みんな"男性ホルモン"がほの見える。例えばマニッシュなパンツスーツみたいに、もともと"男もの"から生まれた装いほど、実は女をセクシーに見せるというふうに、"男性"性が女を際立たせるのは確かなよう。

モテの決め手はむしろ男性ホルモンという事実

だから、ただひたすら女性ホルモンが美の決め手と言いきることはもうできないのだ。確かに女性ホルモンの分泌が減ると、肌がカサつき、目の輝きが減り、胸がしぼむけど、女性ホルモンだけでは女の"魅力"って生まれない。むしろ、両方多い女が色気を宿すのだ。女性ホルモンだけに偏ると、ピンクのひらひらした服を好んで着たりはするけれど、意外に男にモテない乙女チックな女ができあがる。モテの決め手はむしろ男性ホルモン。おそらくは、男の征服欲を刺激するのは、従順な女性ホルモンじゃなく、言いなりにはならない男性ホルモンだから。逆を言えば、ジャニーズ系はもちろん、松田翔太とか小栗旬とか、あのあたりは明らかに女性ホルモンの分泌が多いはずで、男も"混合タイプ"のほうがはるかにセクシーなのはわかるだろう。

いずれにしても、女性ホルモンがひたすら多い女だけが美しくセクシーなのじゃない。でなければ更年期を迎えて女性ホルモンが激減する年齢でも、20代にも負けないモテっぷりを誇っているマドンナとかシャロン・ストーンとか、大地真央の"女度"をほかにどう説明しよう。そうではないのだ。むしろ男性ホルモンがあるから、女性ホルモンが目を覚ます。美貌のニューハーフよりも、男女ホルモンが体の中で高め合っている女の美貌が光る時代がついに始まりそうである。

●この特集に掲載された商品のお問い合わせ先は、巻末の協力店リストにあります。